読者の広場

伯母 柴崎葉津よの思い出

長野県飯田市　片桐 晴夫

葉津よ伯母のことを想う時，私の心は，今から半世紀前，東京で過ごした学生時代の頃に一気に飛んで行く。信州の田舎町から初めて東京という大都会へ出たのは，大学受験の1957（昭和32）年の3月初旬のことだった。私は目指す大学を見事に落ち，浪人生活を余儀なくされた。自宅で頑張ることも考えたのだが，一日でも早く親の下，山間の町から離れたかった。予備校の資料を取り寄せて，当時東京文京区御茶ノ水にあった「正修予備校」に申し込み入学を許可された。問題は住まいだったが，幸い，寮が千葉県幕張町にあり，ここから総武線電車で片道1時間弱をかけて通学した。予備校へは真面目に通ったが，何しろ全国から様々な学生が集まっている寮生活だ。北海道釧路市の網元の息子，九州天草の人，金沢市二水高校出身の若者，浜松北高校出の青年，秩父市から来た学生等々，まさにその寮は全国区だった。

それまでに私は寮生活を経験したことはなかった。こういう人間にとって，集団生活は新鮮であり，大いに楽しいものだった。今考えると，あの時の1年間の生活は私の人生にとって実に貴重なもので，勉強の合間にお互い部屋を訪れ，色々な話に花が咲き，夏までは浪人生活の悲壮感などは，どこ吹く風の気分で過ごした。秋風が身に染みるようになって初めて真剣になって勉強に取り組み始めて，翌年の春には何としても目指す大学に合格しなければならないと思った。

私が初めて伯母と会ったのは，最初の大学受験の時だった。二日間の試験が終わり，以前に連絡しておいた文京区大塚の旅館に，従兄が迎えに来てくれて，タクシーで伯母の家まで連れて行ってもらった。伯母は母の姉で，信州下伊那郡羽村小川の農家の長女として生まれ，山形県大石田町出身の柴崎芳太郎と結婚して，東京に住んでいた。私が伯母に出会った頃には，伯父は既に亡くなっており，杉並区和田本町に住まいを移していたが。私は両親から「東京の伯母さん」という名前で，一度も会ったことのない葉津よ伯母のことを聞いていた。美人で聡明な人ということは，子供心の中に染みこんでいたのである。

従兄の賢三さんと一緒に乗った車はかなり長く走り，やっと杉並区の家に着いた。「よく来てくれましたね」これが伯母が私の顔を見た時に最初に発した言葉だったと記憶している。その夜は泊めてもらい，翌日は東京見物をして信州の自宅へ帰ったのだった。

私は学力不足のために，大学への門は閉ざされ，浪人生活を送ったが，その間にも伯母の家を時々訪れ，いろいろとお世話になった。

1958年の3月に目指す大学に何とか入学出来て，一年間お世話になった幕張町の寮から文京区茗荷谷の下宿へ移り，そこから徒歩5，6分にある大学へ通っていた。伯母の住まいには以前より繁く訪れていた。伯母は，その度にいつも伯父の思い出話をしてくれた。伯父は陸軍参謀本部陸地測量部に勤務する測量官で，全国の山々，中国，そして，シベリアまで行き，測量に従事したのだった。伯母の話はいつでも伯父が富山県の名峰「剱岳」に登頂したことに落ち着くのだった。明治40年7月，本邦初登頂だと思って辿り着いた山頂に，「錫杖の頭と剣の先」が置いてあったというのである。伯母の話は繰り返された。私はややくどいと思いながらも，これを聴くのが私の務めのような気持ちで伺っていた。伯母はなかなか記憶力の良い人で，かなり詳しく話してくれたように覚えている。

伯母は伯父の留守の間，夫の無事を祈り，家庭を護り，8人の子供を育てることに専心したのだ。「剱岳」の話を私に聴かせたのは，どのよ

1962年の3月 伯母75歳の時 杉並区和田本町の家にて
私23歳の大学卒業の時

うな気持ちからだったろうか。1982（昭和57）年2月11日，95歳で逝った伯母（戒名は貞心院慈松葉光大姉）に，今となっては訊ねることは出来ない。

新田次郎氏の小説『劔岳〈点の記〉』が出版された時，早速読んでみた。氏はこの作品を書くために，この山に自ら登り，伯父の登山の追体験をしようと思われたのだろう。私は再読，三読し，小説の上で伯父の登山の経験を味わおうとしたのである。が，それは所詮小説の上のことで，実際の経験とはならない。やはり，実際に登っていない山のことは解らないのである。

私は登山が大好きだ。これまでに南アルプスを中心に色々な山とご縁があった。しかし北アルプスは，白馬三山と燕岳に登頂しただけで，それ以外の高峰には入ったことはない。ましてや，険峻な「劔岳」は，私のような初心者を寄せ付けないし，自分から登ろうとも思わない。が，せめて，近くから仰ぎ見ることは是非やりたいと思っている。それがいつになるかは定かではない。

21世紀の現在では，登山も随分容易になったと思う。明治の頃は，登山者は大変苦労して高山に入ったのだろう。英国人のウオルター・ウェストンの名著『日本アルプスの登山と探検』にも苦労話が沢山出てくる。現在，私に出来ることは，伯父柴崎芳太郎の登山とそれを精神的に支えた伯母葉津よの心を少しでも想い見ることだと思う。

問題の「錫杖の頭と剣の先」（重要文化財）は，長らく伯父の長男芳博氏の手元にあったが，現在では富山県立山博物館に所蔵されていると聞く。是非，拝観したいと思う。

それにしても，このたび封切られる予定の映画「劔岳　点の記」（木村大作監督作品）の内容が気になるのである。

除夜の鐘聞きつ最後の歌一つ記して今年の
日記を了へけり　　（歌集「やまの樹」より）

初登頂深く信じて極めたる劔の峰に錫杖光る

晴夫